

埼玉育ちのグローバル人

文教大学文学部 准教授

福田倫子さん



「グローバル人ってどんな人?!」

第3回

日本語教育・日本語教員養成に携わっている今思うこと
—日本の大学生との関わりの中で



日本語教育・日本語教員養成に 携わっている今思うこと —日本の大学生との関わりの中で

「お仕事は？」と聞かれて「外国人に日本語を教えています」と言うと80%の確率で次の言葉が返ってきます「へええ、じゃあ英語が話せるんですね、すごい！」いえいえ、アメリカ人やイギリス人に教えているとは言っていないのですが。。。日本語を勉強したいと思ってくれている人は世界中にいるんですよ、という言葉が喉元まで来ますが、それを抑えて答えます。「日本語で教えてるんですよ」「へええ（おそらく、ここで興味を失う）…」私も自分が日本語教師になる前はそう思っていました。ですが、英語が話せなくても、ずっと日本にいてもグローバルな人っているな、と感じます。

私は数年前から、大学の外国人留学生別科で日本語を教えると同時に文学部で日本語教員養成コースの授業や日本語教育ゼミの担当もしています。コース登録者やゼミ所属者の中でも卒業後に日本語教師を職業とする学生は一握りですが、それぞれが日本語や日本語教育、日本語を学ぶ人々に興味を持っていることは確かです、それはとても嬉しいことです。

コースの授業の中に、毎年、留学生別科の学生や交換留学生と話してみようという企画があります。留学生が日本の大学生の生活や考え方につい

て知りたいことを事前に質問し、日本人学生はそれに対する答えを用意しておきます。さらに、留学生に対する質問も用意します。当日は5名前後の日本人学生と、2～3名の留学生がグループになり、質問されていたことやその時に話題に上がったことなどを話します。15分ごとに留学生が次のグループに移動して、また新たな組み合わせで話し合いが始まるシステムです。初めは緊張していてあまり話が続きなくても、少し時間が経つと初対面とは思えないほど盛り上がり、「次のグループへ移動してください」と何度言ってもなかなか話が終わらないグループもあります。



写真1：留学生と学部生の交流の様子（1）

活動が終わった後、日本人と留学生の双方に感想を出してもらおうと、興味深いコメントが書かれています。日本人学生は、留学生の国に関する基本情報を事前によく調べて質問や回答を用意していたにもかかわらず、もっと調べておけばよかつ

た、そうすればもっともっと話げできたのに、といった感想を述べます。これは活動によって日本以外の国や人々に目が向き、さらに知りたいと思えるきっかけになったということで、今後の進化に期待したいなと思います。一方、留学生の方には日本人学生と話げることができて楽しかったというポジティブな感想ばかりでなく、中には手厳しいコメントもあります。それは、日本人に質問をすると誰もなかなか答えてくれないし、自分の意見を持っていないので議論ができなかったといったものです。日本語で話をするので、言語使用の面では日本語母語話者の方が圧倒的に有利で、考えていることを言葉にするのに何の問題もないはずなのです。しかし、活動の様子を見ていると、留学生から質問が出た時にお互いに顔を見合わせて誰も何も言いださない場面を、確かによく目にします。他の日本人に遠慮して言えないのだろうと思うのですが、せつかくの交流の機会なのにもったかないと残念に思います。相手の考えを受け取るばかりで自分(達)の考えを発信しなければ、コミュニケーションに使用する言語ができたとしても交流につながるとは限らないのだ、とつくづく感じます。



写真2：留学生と学部生の交流の様子(2)

この授業は学部2年生が中心なのですが、その後、変わっていく学生がたくさんいます。留学のような特別な海外経験がなくても、3年生、4年

生と学年が上がるとともに外国人学生との交流が実に自然になっていくのです。「交流するぞ!」という気負いもなく、「何を話せばいいんだろう」という緊張感もありません。3年生や4年生の授業で書いてもらっているコメントやレポートなどを読んでも、言語や文化が異なるという分かりやすい違いに注目して外国人と日本人との違いを述べるような考え方から、同じ人としての共通点を広い視野から考えるようなコメントが増えてきます。

私が勤務する大学は決して留学生が多いわけはありませんが、学生たちは見事に進化を遂げていきます。前述の授業のような日々の小さな気づきや、「多言語交流室」(留学生や日本人学生が集まって言語を教え合ったり、交流したりする部屋)などを利用して留学生と触れ合う機会を積極的に持つことで、外国に行かなくても英語が話せなくても、学生たちは「グローバル人」に近づいているのだと感じるのです。

「グローバル人ってどんな人?!」というテーマについて、このエッセイを書いている間もずっと考えてきました。どうやら私の考える「グローバル人」は、「出身や言語の壁を越えて、出来事そのもの、人間そのものを受け入れることができる人。同時に自分の立場や考えも明らかにすることができる人。そして、そうなるために立ち止まらず、努力を重ねられる人」という考えにまとまりつつあります。マレーシアでの少数派としての経験、日本での留学生との触れ合いから得たこと、日本語教育を学ぶ学生の成長から感じていること、を改めて文章にしてみようやく結論めいたものに辿り着きました。みなさんの考えと違ってもそれはまたそれで面白いなと思います。

最後に、個人的に好きな概念をご紹介したいと思います。「エポケー」と言ひまして、日本語では「判断停止」または「判断保留」と訳されることが

多いようです。言葉の響きが可愛いというのも好きな理由の一つです。意味は、「自分が持っている価値観や判断基準では理解できないことに遭った時、とりあえず判断を保留すること」で、異文化理解の場面で役に立ちます。この考え方を知っていたら、マレーシアで笑顔のない店員さんを見ても「なんて愛想がないんだ！」と苛立つこともなく、大学院時代に友人が腕を組んできてもビックリすることもなかったでしょう。「笑わないのはどうしてかな」「腕を組んでみるのもいいかも」と心穏やかに異文化理解を進めることができたのではないかと思います。皆さんもよかったら日々の生活に「エポケー」を取り入れてみてください。

拙い文章をお読みいただき、ありがとうございました。

(終)